

A氏のエッセイ集から

稲宮 健一

年末に当会A氏のさんのエッセイ集「忘れえぬ事ども」が届いた。二百頁余に及ぶ大作で、五〇編程が綴られている。最初に9・11のイスラム過激派の同時多発テロの衝撃的な驚きを書き留めている。ニューヨーク在住のご子息と暫く連絡が取れずいらだったとのこと。同じ映像を私はつくばのテレビで見っていた。この激突は三千人余に及ぶ命を奪うピルの倒壊へと繋がる。9・11が起きたのは2001年、それに触発され、2003年のイラク戦争、さらには、最近まで続くアフガニスタン紛争へと争いの流が続いた。エッセイ集では筆者と共に訪れた重光葵記念館の記事がある。ここでは日中戦争、太平洋戦争と日本が関わった戦争を当時の外相として体験した事柄を数々の資料と共に展示している。

時系列では先の戦争は重光葵著「昭和の動乱」に詳しく述べられており、戦争が起きた原因と結果がはつきりと記されている。しかし、次の9・11になると、イスラム教の宗教的色彩、中東の石油の利権、アラブの王族の支配などが絡み合い終わりの見えない紛争の始まりだった。

そして、現在では昨年二月にロシアによるウクライナ戦争が勃発し、壊滅的な破壊活動が進行中である。この紛争が報じられるまで、元ソ連邦の一員であったウクライナへの侵攻の原因が漠然としていた。正月にこの件で、多くの権威筋による喧々諤々の議論が展開され、それによると、東西のパワー・バランスのせめぎ合が顕在化して武力行使に至ったとのこと。争いの動機はプーチンが夢想する帝国時代の領土と権益の復活とかわれている。ロシアでは独裁者に諫言する社会機構がないのが歯がゆいし、冷戦時代のカーテンの東の国々が終結後、それまでの治世に背を向けて脱退した現実を理解しようとしていない。情報統制で客観的で正確な事実を国民に伝えず、国民はロシアの外の世界で常識である認識能力が奪われている。結局為政者の目が塞がれているのと同じだ。争いが収まる年になって欲しい。